

延慶本平家物語の加藤次景廉武勲譚

— 古文学習における地域素材の活用 —

A Good Use of the Local Teaching Materials about the Japanese Classical Literature
in the Class of National Language

弓 削 繁

YUGE Shigeru

1. はじめに

平成20年3月に公示された中学校新学習指導要領・国語は、古典（古文）について、「伝統的な言語文化に関する事項」のなかで、

第1学年、「文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること」

第2学年、「作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと」

第3学年、「歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと」

という、段階的、発展的な学習目的を掲げている。また、平成21年3月公示の高等学校学習指導要領解説においても、今回の改訂の趣旨の一つとして、

古典の指導については、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する。

という基本方針が掲げられている。

然るに、「生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する」ことは、それほど容易なことではない。現実には、中学校・高等学校の入門期において既に古典に躓く生徒が多いのである。国立教育政策研究所教育課程研究センターが平成17年に高校3年生約3万人を対象に行った教育過程実施状況調査の質問紙調査によれば、「古文は好きだ」という問いに対して、「そう思う」と回答したのが8.5%、「どちらかといえばそう思う」が14.6%、「どちらかといえばそう思わない」が21.5%、「そう思わない」が52.2%であり、肯定的な回答が23.1%にとどまるのに対して、否定的な回答が実に73.7%にも上っているのである。

そこで、古文が嫌いな理由を探ってみると、それはほぼ、①文法（語法）が大変だから、②ことが難しい（中途半端に現代語とずれている）から、③話の内容に興味を持たない（面白くない、古くさい）から、という3点に集約される。古典学習に否定的な回答を寄せた生徒の多くは、古典の世界に「親し」んだり「楽し」んだりする以前に、いや「古典の世界に触れる」前に、既に古典に対してかなり頑に抵抗感や拒絶感を抱いてしまっているのではなかろうか。それには今日の生徒を取り巻く言語環境や生活環境上のさまざまな要因が考えられるが、それ故になおさら入門期から生徒の実態を踏まえた、古典に心を開かせる授業展開が求められてくるのである。その点、身近で現実感のある地域素材は、生徒のインタレストに応え、古典の世界に興味を抱かせるものとして有効な教材の一つになり得るものと思われる。ここでは『平家物語』に関わる地域素材を紹介してみたい。

2. 『平家物語』の景廉武勲譚

周知のとおり、『平家物語』は古文の定番教材として、中学校では2年生の教科書に「那須与一」（巻11）、「敦盛最期」（巻9）のいずれかが「祇園精舎」（巻1）とともに採択され、高等学校では通

常「国語総合」に「宇治川先陣」(巻4)、「橋合戦」(巻4)、「木曾最期」(巻9)、「能登殿最期」(巻11)のうちのいずれかと「祇園精舎」が採られている。また、「古典講読」ではこのほかに「俊寛(足摺)」(巻3)、「仲綱(競)」(巻4)、「忠度都落」(巻7)、「敦盛最期」,「先帝身投」(巻11)、「大原御幸」(灌頂巻)などが採られている(最も詳しいのは明治書院の『新編古典講読(総合)』で、「祇園精舎」,「富士川」(巻5)、「小督」(巻6)、「入道死去」(巻6)、「維盛都落」(巻7)、「忠度都落」,「猫間」(巻8)、「宇治川先陣」,「木曾最期」,「坂落」(巻9)、「敦盛最期」,「先帝身投」,「能登殿最期」,「大原御幸」の14章段を採る)。

これらはいずれも内容、表現ともにすぐれた文章であり、是非楽しみ、親しんで読んでほしい物語であるが、それらが生徒の日々生活する土地に関連している話だということになれば、よりいっそう身近なものとなり、興味も増してくるはずである。幸いにも岐阜県内には『平家物語』に関係する遺跡や伝承が多く散在している。例えば、平家を滅ぼして鎌倉に幕府を開いた源頼朝に関するものには、平治の乱の戦いに敗れて大垣市青墓町の長者大炊のもとに身を寄せた義朝親子の物語(山中に義朝の次男の朝長の墓があり、円興寺に位牌がある)や、頼朝生捕りの物語(金比本『平治物語』の夜叉御前入水譚、髭切・泉水すり替え譚⁹⁾など)が興味深いし、大垣市墨俣町下宿には治承5年(1181)3月の墨俣合戦で討ち死にした義円(頼朝の異母弟。義経の同母兄)の墓があり、義円地蔵が祀られている。また、治承4年5月の以仁王の乱に関しては、関市植野の蓮華寺に以仁王に加担し、宇治の戦いで自害した源三位頼政の首塚と伝える遺跡があり、同じく郡上市明宝気来には「宇治川先陣」の際、梶原景季が乗った名馬磨墨の産地だという伝承がある(道の駅明宝には磨墨に跨がる景季の騎馬像が立つ)。授業で「宇治川先陣」や「橋合戦」を扱う際に採り上げれば親近感が増すに違いない。「敦盛最期」に関しては、大垣市墨俣町上宿の満福寺に、敦盛を討ち取った後に道心を起こして法然に帰依したという熊谷直実にまつわる絵解きが伝わるほか、揖斐郡揖斐川町の横蔵寺にはその直実の墓と伝えるものがあり、岐阜市雄総の護国寺には蓮生(直実)が建てたという宝篋印塔が残されている。

そして、就中興味深いのが恵那市岩村町である。この地は治承4年(1180)8月17日の頼朝挙兵に深く関わっている。すなわち加藤次景廉という武士が大事な頼朝の緒戦で伊豆の代官山木兼隆の首級を挙げ、その功により現在の岩村町を中心とする遠山庄の地頭に補されたというのである。そして、その後を継いだ嫡子の景朝が遠山の姓を名乗って居住、以後子孫は明智・苗木などにも及び、遠山氏は恵那全域に張り行う一大豪族となっていく。つまり、中世の東濃発展の礎は、頼朝挙兵の際の加藤次景廉の勲功にあったといっても過言ではないのである。

従来、景廉の勲功は一般に『吾妻鏡』によって知られてきたが、実はこの出来事は『平家物語』の読み本系(非当道系・広本系)諸本の語るところでもあり、なかでも延慶本の本文は古い姿を留めるものとして注目される。そこで、まずその内容を梗概によって紹介してみよう(参考資料1に原文を掲げておいたので参照されたい)。

(頼朝は以仁王の令旨を受け、治承4年8月17日に挙兵し、伊豆の代官屋牧兼隆を夜討ちにせんとした。)そして、子の刻、北条時政父子、佐々木定綱兄弟以下が数十騎で屋牧館に向け出陣した。それと入れ違いに、加藤次景廉は只一騎、宿直のために頼朝の邸内に入った。この景廉はもと伊勢国の住人景員の二男であり、元員(光員)・景廉の兄弟はともに弓矢の達者であったが、殊に景廉は「クラキリナキ甲ノ者、ソバヒラミズノ猪武者」(比べようのない剛勇の者、わき目もふらぬ猪武者、の意か)で、その夜、頼朝の密計を仄聞してやって来たのであった。

さて、北条時政は佐々木定綱に、兼隆の一の郎等で屋牧館の手前に住む権守兼行の追討を差配した。定綱は搦手に廻り、経高がまず正面から討ち入った。経高は待ち受けていた兼隆の矢で負傷したが、定綱・盛綱がその場に押し寄せ兼綱を討ち取った。佐々木兄弟は、そのまますぐに屋牧館へと向かった。

一方、頼朝は景廉の来訪を喜び、夜伽に留めた。遙かに夜更けた後、頼朝は「時政を兼隆追討に遣わしたが、命じたとおり兼隆館から火の手が上がらないのは、討ち損なったのであろうか」と独り言を言った。景廉はそれを聞くが早いか、すぐに兜の緒を締めて出て行こうとしたが、頼朝はそれを召し返し、これで兼隆の頸を貫いて来いと言って、手ずから「銀ノヒルマキシタル小長大刀」を与えた。景廉が馳せ寄せてみると、時政は攻めあぐんでいて、厳しい状況を説明した。景廉は時政の雑色の源藤次に命じて防ぎ楯を突き刺せると、その楯の陰から進み出て、敵3騎を射殺した。続いて館内へ突入すると、侍の間の高燈台の前にいた浄衣男が大長刀で立ち向かって来た。その男を刺して投げ臥せ、さらに奥の間に攻め入ったが、そこには火が白く灯されていた。敵の兼隆は太刀を抜きさし、細目に開けた障子（襖）の隙間から様子を窺っていた。景廉が大長刀で障子を引き開けると、兼隆は片膝を立て、太刀を額に当てて待ちかかっていた。兼隆は突入する景廉を防ごうとして太刀を鴨居に切り付けてしまい、抜こうとするところ、頸を搔かれてしまった。そこに注記という名の後見の法師が打ち掛かったが、これも二の刀で頸を討ち落とされた。景廉は手筈どおり障子に火を放つと、

法華経を一字も読まぬ加藤次が八巻の果てを今見つけるかな

(法華経を一文字も読んだことのないこの自分が、最終巻である第八巻のその末尾、すなわち山木兼隆の最期を今見届けたことだ、の意。)

と嘯き、すっと外に出て大声で兼隆討滅の名乗りをあげた。

頼朝は兼隆館が焼けるのを見て、景廉の功を確信して喜んでいたが、そこに時政からの使者が来て兼隆討滅を報じたのであった。

景廉はすなわち今戦功を挙げたのみならず、後世にまで名望を残したのである。

ところで、この延慶本の叙述を『吾妻鏡』治承4年8月17日条(参考資料2参照)と対観してみると、両者には多くの相違点があって、それぞれの特色が明らかになる。

『吾妻鏡』の特色は、何よりも編年体の歴史書という性格上、事の顛末を時系列に沿って記述していくところにある。すなわち、

- ・未の尅、佐々木兄弟、頼朝のもとに参着。
- ・戌の尅、兼隆の雑色男を生捕る。
- ・子の尅、佐々木兄弟、堤権守信遠を襲い、信遠を討ち取る。
- ・(同じ頃)、北条父子、兼隆を襲う。この間、佐々木兄弟も馳せ加わる。また、頼朝の命により盛綱・景廉も援軍に駆けつけ、兼隆を誅戮する。
- ・すでに暁天。士卒帰参し、頼朝、兼隆主従の頸を覽る。

という具合である。そして、その叙述に注意すると、追討に向かう経路が「蛭島融を行くべきか」、「蘇木を北に行き、肥田原に到る」、「牛鋤を東に行き」、「天満坂の辺に進みて」、「蛭島通の堤に」などと具体的な地名をあげて記述されており、また、

- ・戦勝祈禱のため、住吉小大夫昌長を軍勢に添えたこと。
- ・堤権守信遠(延慶本は権守兼行)追討の案内者を「北条殿の雑色、字は源藤太」とすること。
- ・佐々木経高が放った矢が「源家、平氏を征する最前の一箭」となったこと。
- ・兼隆館炎上の煙を見させるために「御厩舎人江太新平次を以て樹の上に昇らし」めたこと。

など、延慶本には見えない事柄が種々記されている。恐らく、ここには鎌倉政権草創の過程を、「事実」(必ずしも客観的事実ではない)を以て定着させようという作為が働いているのであろう。

『吾妻鏡』は叙事を旨とし、特定の人物の活躍を集中的に叙述することは稀である。ただ北条氏(時政)に限っては、8月6日条に

真実の密事においては、北条殿のほかこれを知る人なしと云々。

とあるとおり、はじめから特別の存在として扱われており、この場面でも頼朝と進撃の手筈を親しく語り合い、佐々木定綱に信遠襲撃を指図するなど主体的に立ち回る姿が捉えられている。然るに、肝心の兼隆を討ち取った人物については、あくまで盛綱・景廉の二人とされており、景廉に絞ってその勲功が特筆されているわけではない。

これに対して、延慶本は明らかに景廉の勲功譚という形をとっている。すなわち、『吾妻鏡』（8月6日条）では、

（山木襲撃の日時を卜定した後）、工藤介茂光・土肥次郎実平・岡崎四郎義実・宇佐美三郎助茂・天野藤内遠景・佐々木三郎盛綱・加藤次景廉以下、当時経廻の士の内、殊に以て御旨を重んじ、身命を軽んずるの勇士等おのおの一人ずつ、次第に閑所に召し抜きんで、合戦の間の事を議せしめ給ふ。未だ口外せずと雖も、偏に汝を待むに依つて、仰せ合はせらるるの由、人毎に慇懃の御詞を竭さるるの間、皆一身抜群の御芳志を喜びて、面々に勇敢を励まんと欲す。これ人において独歩の思ひを禁ぜらると雖も、家門草創の期に至るまで、諸人の一揆を求めしめ給ふ御計ひなり。とあって、景廉ははじめから事情を知った上で盛綱とともに宿直に候じているのであるが、延慶本では北条父子・佐々木兄弟の発向とすれ違いに参上し、夜伽を命じられて「遥ニ夜更テ後」に頼朝の独り言を聞き真相を知ることになっている。援軍に参ずるのも自らの意志のように描かれ、賜った長刀も単なる「長刀」ではなく、「銀ノヒルマキシタル小長大刀」とされている。この「小長大刀」は、第二中（巻4）の「入道巖島ヲ崇奉由來事」及び「雅頼卿ノ侍夢見ル事」からのコンテキストを勘案すれば、清盛が夢のうちに巖島大明神から賜わり、その後八幡大菩薩から頼朝に渡されたという「銀ノ蛭巻シタル小長刀」、すなわち軍事権（征夷大將軍）の象徴である「節刀ト云御劍」（同「雅頼卿ノ侍夢見ル事」）を想起させるはずである²⁾。ここはそのような大切な長刀を手ずから賜るほど頼朝から信頼され、それに応えて大きな歴史的使命を果たしたのだと語りたいのであろう。つまり、この話の主題は、最後を「景廉ハ非^{フルノ}レ^{ミニ} 戦功於当時ニ、専^ク残^リ名望於後世ニ。」という頌詞で締め括るとおり、頼朝政権の樹立に寄与した景廉の功績の大きさを語る場所に認められるのであり、加藤氏の軍忠状のごとき性格を具有しているのである。

3. 景廉と遠山庄

次に、加藤次景廉と遠山庄との関係について見ておきたい。まず考えなければならないのは、景廉が遠山庄の地頭に任じたという事実についてである。比較的古い考証に寛延元年（1748）に岩村乗政寺の僧隆峯が著した『遠山来由記³⁾』があり、隆峯はここで「建久六年乙卯ノ春、頼朝公ヨリ景廉ニ美濃国遠山莊ヲ封ゼラル。時ニ三月三日御下文ヲ賜フト云」という遠山庶系の所説を紹介した上で、この時期の頼朝は東大寺供養のため上洛途上にあったことを勘案し、

不知、斯日景廉ニ莊園ヲ封ゼラレ、御下文ヲ受ルノ事有之ヤ、未詳ナラズ。然ドモ、景廉時ニ旅行ノ供奉タリ。且將軍美濃路ヲ歴テ來ル。此時節、此遠山ノ莊ヲ附スル者ナルカ、思擇。と慎重な推測をしている。確かにこの日付の「源頼朝下文写」なるものが内閣文庫に伝存していて、そこには

下 美濃国恵那郡内遠山庄事

右、為勲功之賞、遠山加藤次景廉所充行也者、早令領知可被專所務之状如件、

建久六年三月三日

と記されている。しかし、その真偽のほどは定かではない⁴⁾。そこでいま『吾妻鏡』を参観してみると、景廉は「当時経廻の士の内、殊に以て御旨を重んじ、身命を軽んずるの勇士」（治承4年8月6日条）の一人として扱われており、平家追討の折には頼朝から病気を見舞う「慇懃の御書」を送られ（元暦2年3月6日条）、また「西海にありて殊に大功を抽んずるが故」に義時・朝政らとともにその

勞をねぎらう御書を送られている（同11日条）。平家討滅、幕府草創にあたり、景廉はこのように頗る高い評価を得ているわけで、その勲功に対して遠山庄が充行されたとすれば、今のところ、明確な記述はないものの文治元年（1185）11月23日の守護地頭の勅許に関わるものと考えておくのが合理的ではなかろうか。景廉の所領については他に安田義定の収公跡の遠江国浅羽庄や甲斐国大原庄、伊豆国河津庄、備前国長田庄、美濃国小木曾庄などが知られる。

それでは、景廉は実際に遠山庄に居を定めたのであろうか。元文3年（1738）に伊藤実臣が著した『美濃明細記』はこの点について、

加藤次景廉（勢州加藤景貞之男、称遠山判官、従五位下、左衛門少尉、法号覚蓮坊、承久三年八月卒）頼朝時代居之、為京都守護任廷尉、卒而後葬郭内、祭景廉之靈、号八幡社、本丸鎮座。遠山左衛門尉景村 景廉跡居之、葬霧ヶ城西山武並山、景村之靈を祭り武並権現と号す。岩村より十町斗り西の築地に社を営みて若宮八幡と号す。

と記し、既に頼朝時代から岩村城に居住していたものとみている。しかし、おそらくこれは過言であろう。ここは上掲の『遠山来由記』が「準之、斯年景廉自ノ領地遠山ノ莊ニ入者歟」との通説について、

東鑑〈十五〉建久六年七月十日ノ記ニ、今度將軍上洛ノ間ダ、供奉ノ御家人等各休假（暇）ヲ賜テ自ノ領国へ帰ルト云々。以之察スルニ、景廉遠山庄ニ入事、或ハ斯時ナルベキ歟。（中略）但シ景廉ノ如キ、是頼朝ノ近臣也。常ニ座右ヲ離レザル者ナレバ、縦イ領国ニ入ルトモ惟ダ暫時ノ止留ナラン而已。

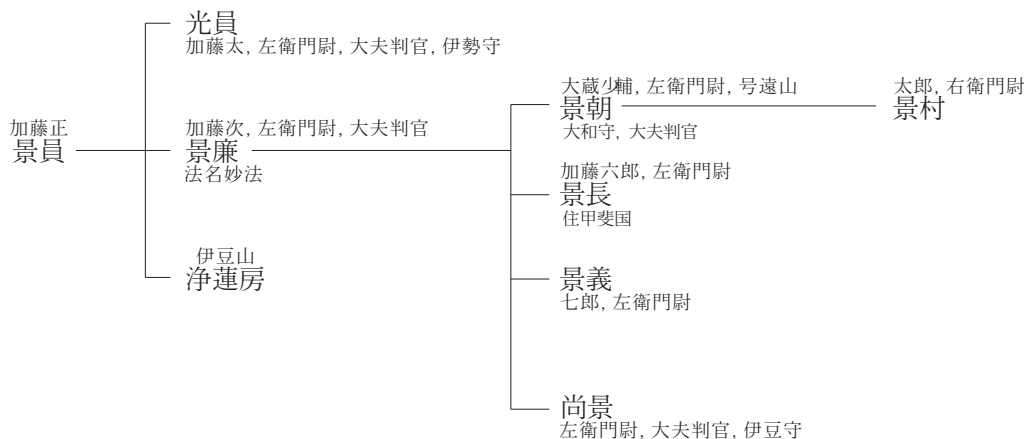
と注しているのが首肯されよう。改めて『吾妻鏡』に景廉の主な足跡を辿ってみると、

- ・治承4年8月17日 伊豆代官山木兼隆を討ち取る。
- ・元暦2年1月26日 平家追討のため、範頼に従い病身をおして豊後に渡る。
- ・文治元年10月24日 勝長寿院落慶供養に随兵として供奉す。
- ・文治5年7月19日 頼朝の泰衡追討に従軍す。（義経衣川の戦い）
- ・建久元年11月7日 頼朝の入洛に供奉す。
- ・同4年5月28日 頼朝の富士野の夏狩に供奉す。（曾我兄弟の仇討ち）
- ・同年11月28日 命により安田義資を梟首す。
- ・同5年2月2日 泰時の元服の儀に参列す。
- ・同6年3月12日 頼朝の東大寺供養に供奉す。
- ・正治2年1月24日 梶原景時の乱により、所領を収公される。
- ・建仁3年9月2日 比企能員の追討に従軍、能員嫡男を梟首す。（比企の乱）
- ・建保2年7月27日 実朝の大慈寺供養に供奉す。
- ・建保7年1月27日 実朝の鶴岡八幡宮拝賀に檢非違使として供奉す。
- ・翌28日 実朝暗殺を悼み出家す。
- ・承久3年5月23日 承久の乱に上洛せず、鎌倉を留守す。
- ・同年8月3日 病により死去、法名覚蓮房妙法。

という次第であり、やはり景廉は幕府の重臣として終生関東に居住し將軍三代に仕えたものかと思われる⁵⁾。遠山庄は景廉以前から成立していたようであるが、遠山姓を名乗るのは嫡子の景朝からであり（『吾妻鏡』承久元年7月19日条以下）、景朝はまた承久の乱の後、乱に加担した一条宰相信能の身柄を預かり（同3年6月25日条）、遠山庄で斬首している（同7月5日条）。このことは『六代勝事記』『海道記』『承久記』の記すところでもある。これらのことから推して、確かに景朝も鎌倉にあって頼経・頼嗣・宗尊の歴代將軍に近仕してはいるものの（承久元年7月19日、安貞2年7月23日、嘉禎3年7月11日、仁治2年12月21日、建長6年1月1日条等々）、遠山庄を本拠にしていたものかと推されるのである⁶⁾。

4. 景廉の家系

最後に景廉の家系について見ておくと、『尊卑分脈』など諸系図が伝存するが、これらには少なからず誤りが含まれている。然るに、最も信頼に足るのは網野善彦氏が紹介している蓬左文庫蔵『諸士系図』所収の「加藤遠山系図」である⁷⁾。以下に小稿に関連する部分のみを抄出しておこう。



景廉の出自については、延慶本に

此景廉ハ、元ハ伊勢国住人、加藤五郎景員ガ二男、加藤太元員ガ舎弟也。父景員、敵ニ怖テ、伊勢国ヲ逃出テ、伊豆国ニ下テ、公藤介茂光ガ贅ニ成テ居タリケリ。

とあるのが概ね正しいであろう。加藤氏はもともと伊勢国の住人であったが、父景員の時、伊勢平氏の郎等伊藤氏と衝突して関東に生地を求め、伊豆の工藤茂光に武勇を買われてその娘贅となったのである⁸⁾。その間の経緯は『源平盛衰記』巻二十「八牧夜討」に次のように語られている。

此ニ当国住人ニ加藤太光胤・加藤次景廉トテ兄弟二人アリ。是ハ、

都ヲバ霞ト共ニ出シカド秋風ゾ吹白川ノセキ

ト云秀歌読タリシ能因入道ニハ四代ノ孫子也。彼能因ガ子息ニ月並ノ蔵人ト云ケル者、伊勢国ニ下テ柳ノ馬入道ガ婿ニ成テ儲タリシ子ヲ、加藤五景貞ト云キ。後ニハ使宣ヲ蒙テ加藤判官トゾ云ケル、其子ドモ也ケレバ、加藤大・加藤次ト云。本伊勢国ニ住ケルガ、父景貞ニ敵アリ。平家ノ侍ニ伊藤ト云者也。彼敵ヲ殺シテ本国ニハ不_レ安堵、東国ニ落下テ武蔵国秩父ヲ憑ケレドモ、平家ニ恐テ辞_レ退_レ之_レ。千葉ヲ憑トイヘドモ、同恐テ不_レ置ケリ。伊豆国ノ公藤介ヲ憑ケレバ、甲斐甲斐敷請_レ取_レ之_レ、妹ニ合テ為_レ用心_レ憑置。其故ハ公藤介、三戸次郎ト云者ト中悪シテ常ニ軍シケレバ、剛ノ者ハ一人モ大切也、加藤兄弟心際不敵也ト見テ、軍ノ方人ニセント思ケレバ、平家ニモ不_レ憚、親成タリケルガ、常ニ佐殿ヘ参テタノミ申ケレバ、阻ナク被_レ思召_レテケリ。

勿論能因法師の末裔とするのは荒唐無稽の説であるが、工藤介茂光と縁を結んだのは事実であり、古活字本『保元物語』巻下「為朝鬼が島に渡る事並びに最後の事」には、嘉応2年4月下旬、領地を奪われた茂光のため大島の館を攻め、気後れする勇士どもを尻目に、為朝の頸を挙げたことが物語られている。

当国并に武蔵・相模の勢をもよほして、発向すべきよし院宣をなされければ、茂光にあひしたがふ兵たれたれぞ。伊藤・北条・宇佐美平太・同平次・加藤太・同加藤次・最六郎・新田四郎・藤内遠景をはじめとして五百余騎、兵船廿余艘にて、嘉応二年四月下旬に、大島の館へをしよせたり。(中略)かやうに随分の勇士共も、わろびれてすゝみえず、たゞ外郭をとりまはせるばかり也。こゝに加藤次景廉、自害したりとみおふせてやありけん、長刀をもつてうしろよりねらひよ

りて、御曹子の頸をぞうちおとしける。よつて其日の高名の一の筆にぞ付たりける。
この話も武具を「長刀」とする点などから、兼隆夜討ちと相通ずるものがある。

因みに、「加藤遠山系図」は弟の位置に浄蓮房なる人物を掲出しているが、この僧は景廉武勲譚の成り立ちを考える上で注意される。浄蓮房は諱号を源延といい、「走湯山上下諸堂目安⁹⁾」の安貞2年(1228)1月8日条に、「千日朝講御勸進為御代官開白源延上人〈七十三〉」と見える。これによれば源延は保元元年(1156)の生れで、頼朝挙兵の時点で23歳だったことになる。景廉の弟であったことはこの系図のほか、『吾妻鏡』貞応3年8月8日条に「走湯山浄蓮房〈加藤左衛門実長の叔なり〉」とあることから確認される(「実長」は景廉の子の「景長」の誤りであろう)。

『吾妻鏡』治承4年8月27日条に、

加藤五景員并に子息光員・景廉等、去ぬる廿四日以後三ヶ日の間、筥根の深山にあり。おのおの糧絶え魂疲れ、心神惘然たり。就中に景員老衰の間、行歩進退谷まるなり。(中略)然る間、光員等周章腸を断つと雖も、老父を走湯山〈この山において、景員出家を遂ぐと云々〉に送り、兄弟は甲斐国に赴き(下略)

とあるのによると、景廉兄弟は頼朝に従い石橋山合戦で惨敗を喫したあと、父景員を走湯山に送り届けて敗走しているが、走湯山を頼ったのはそこに弟の浄蓮房がいたからに相違ない。浄蓮房の伝記と信仰については先学の諸説に詳しいが¹⁰⁾、彼はその後將軍実朝以下、三浦氏や和田氏等の信仰を得て関東で重んじられている。

一方、浄蓮房とは別に頼朝が早くから信頼を寄せていた僧に文陽房覚淵がいる¹¹⁾。延慶本『平家物語』・『源平闘諍録』・真名本『曾我物語』には頼朝と政子の婚姻を核とする頼朝伊豆流離説話があるが、福田晃氏の卓説¹²⁾によれば、この説話は覚淵等をとおして頼朝と深い関係にあった伊豆山の信仰風土の中から生成されてきたものだという。そして、その覚淵は「伊豆国密厳院々務次第」に「阿闍梨覚淵〈東寺、加藤次景門(廉)兄弟、文養坊阿闍梨〉」とあって、景廉の兄弟と見做されているのである。浄蓮房源延と文陽房覚淵と(ここにはあるいは混同があるのかも知れないが)、このように近い場に立つ両者に景廉武勲譚と頼朝・政子婚姻譚という説話が付随するのは決して偶然ではないであろう¹³⁾。敵を討ち取って「法華経ヲ一字モヨマヌ加藤次ガ」と嘯く、その言説の背景には景廉を取り巻く信仰環境ならびにこの話の生成の場がほの見えるように思われる。

4. おわりに

以上、中世の東濃地方の発展のもととなった頼朝挙兵時における加藤次景廉の勲功譚を延慶本『平家物語』によって検討してきた。

岩村町には今も加藤次景廉を祀る八幡神社が鎮座し(岩村城の八幡曲輪に旧跡がある)、その西方には嫡子の景朝を祀る武並神社があって、秋祭には武並神社から神輿に乗った景朝が父の景廉のもとに渡御し、翌日還御するという神輿渡御行列が行われている。また、一条宰相信能の終焉の地にはその霊を弔う小祠若宮社が建てられ、それが岩村神社となって今日に至っている。更に旧藩主邸跡には岩村歴史資料館が建てられ、遠山氏ゆかりのあまたの遺品が収められている。国語古文で『平家物語』を学習する際、あるいは社会科で郷土の歴史や文化を学ぶ際、はたまた国語科と社会科の総合学習の一環としても、東濃地方(特に岩村町)では景廉勲功譚は利用価値のある教材であろう。

小稿ではわずか一例を採り上げたに過ぎないが、これによって地域教材の有効性が再認識され、適切な教材の発掘と活用が進めば幸いである。

注

1) 吉田多津雄氏は、金刀比羅本『平治物語』の夜叉御前入水譚は安八郡神戸町に伝わる夜叉ヶ池の雨乞い伝承

- を下敷きにした説話であり、髭切・泉水すり替え譚はかつて大垣市赤坂町周辺に居住した刀鍛冶の伝承に端を発する話であると説いている。「金比羅神社本『平治物語』考—夜叉御前伝承を中心として—」軍記と語り物、第11号、昭和49年10月、「金比羅神社本『平治物語』考—泉水・朝長伝承を中心として—」駒沢国文、第13号、昭和51年2月。
- 2) 「銀ノ蛭巻シタル小長刀」(節刀)の機能については、名波弘彰氏「延慶本平家物語の「青侍の夢」の生成と流通—高野山と比叡山の両宗教圏の交渉をめぐる—」文芸言語研究、第44巻、平成15年10月、佐伯真一氏「「将軍」と「朝敵」—『平家物語』を中心に—」軍記と語り物、第27号、平成3年3月(のち『平家物語週及』所収)、など参照。
- 3) 『岩村町史資料編一 巖邑府誌・遠山来由記』昭和53年6月、所収。
- 4) 黒川高明氏が「偽文書ナルベシ」と断ずるのに対して(『源頼朝文書の研究 史料編』、昭和63年7月、吉川弘文館)、網野義彦氏はこれを疑っていない(「加藤遠山系図」について、小川信編『中世古文書の世界』平成3年7月、吉川弘文館、所収)。
- 5) 『岩村町史』岩村町役場、昭和36年2月。遠山庄そのものは『吾妻鏡』元暦2年5月1日条に、義仲の妹の菊に「美濃国遠山庄内の一村を賜はる」と見えることから、景廉以前から存在していたものと考えられる。
- 6) 『吾妻鏡』寛元元年7月17日条に、将軍の臨時の御出に備えて供奉人結番を定めたという記事があり(景朝は上旬に配されている)、そのなかに「…当時祇候せざるの人数を以て、これを結番せしむ。(中略)また在国等に就き、この人数に加はらずと雖も、時において参上せしむるに随ひてこれを召し具せらるべし」との文言が見える。景朝は在国する者のひとりであったかと思われる。
- 7) 網野氏、注4)の論考。氏によれば、この系図は「榊原氏を中心に、遠山氏一族の結びつきを、加藤氏一門の広範な結合の中で明らかにするために」15世紀半から後半にかけて作成されたものという。
- 8) 野口実氏は「加藤氏も佐々木氏同様、平氏の勢力伸張過程の犠牲者といえる」とする。「流人の周辺—源頼朝挙兵再考—」安田元久先生退官記念論集刊行委員会編『中世日本の諸相』上巻、平成元年4月、吉川弘文館、所収。
- 9) 『静岡県史資料編8』中世四、平成8年3月、に拠った。
- 10) 菊池勇次郎氏「伊豆山源延」補考」金沢文庫研究8-1、昭和37年1月、加藤宥雄氏「源延資料の追跡」金沢文庫研究18-12、昭和47年12月、三田全信氏「伊豆山源延とその浄土教」印度学仏教学研究第19巻1号、昭和45年12月、など。
- 11) 『吾妻鏡』によれば、挙兵に先立ち、頼朝は覚淵に法華經一千部転読の素意を仏前に表白させている(治承4年7月5日条)。
- 12) 福田晃氏「頼朝伊豆流離説話の生成—平家物語・曾我物語より—」国語と国文学、第43巻6号、昭和41年6月(のち『軍記物語と民間伝承』所収)。
- 13) 景廉の法名「覚蓮房妙法」は、「文陽房覚淵」と「浄蓮房源延」の存在と「妙法蓮華經」とを意識したものであろうか。源延は早く延暦寺に入り、澄憲に師事して台教を学んでいる。

参考資料1

延慶本『平家物語』第二末(巻五)「十 屋牧判官兼隆ヲ夜討ニスル事」

猿程ニ、佐々木兄弟十七日未時計、北条へ馳付タリケレバ、(中略)シバラクアリテ、「各物具シテコレエ」ト有ケレバ、ヤガテ物具取付テ参タリケレバ、佐宣ケルハ、「是ニ有ケル女ヲ、兼隆ガ雑色男ガ妻ニシテ有ケルガ、只今是ニ来タルナリ。此気色ヲミテ主ニ語ナバ、一定襲ワレヌベケレバ、彼男ヲ捕ヘテ置タルゾ。此上ハタゞ今夜ヨリテ打ベシ」ト宣ケレバ、十七日ノ子剋計、北条四郎時政、子息三郎宗時、同小四郎義時、佐々木太郎定綱、同二郎経高、三郎盛綱、同四郎高綱已下、彼是馬上歩人トモナク、三十余人、四十人計モヤ有ケム、屋牧館ヘゾ押寄ケル。

門ヲ打出ケレバ、当国住人加藤次景簾(廉)ハ、下人ニ大刀計持セテ、只一騎御宿直ニトテ打通リケルガ、是等ガ打出ヲミテ、「イカニ、何事ノアルゾ」トテ、ヤガテ打通リテ、内へ入ニケリ。此景廉ハ、元ハ伊勢国住人、加藤五郎景員ガ二男、加藤太元員ガ舎弟也。父景員、敵ニ怖テ、伊勢国ヲ逃出テ、伊豆国ニ下テ、公藤介茂光ガ聳ニ成テ居タリケリ。弓矢ノ道、兄弟イツレモ劣ラザリケレドモ、殊ニ景廉ハクラキリナキ甲ノ者、ソバヒラミ

ズノ猪武者ニテ有ケルガ、イカバ思ケム、時々兵衛佐ニ奉公シケルガ、其夜、兵衛佐ノ許ニヒソメク事有ト聞テ、何事ヤラムトテ、行タリケルナリ。

サテ北条、佐々木者共ハ、ヒタ川原ト云所ニ打出テ、北条四郎申ケルハ、「屋牧渡ル堤ノ鼻ニ、和泉判官ガ一ノ郎等、権守兼行ト云者アリ。殿原ハ先ソレヲヨリテ打給ヘ。時政ハ打通テ、奥ノ判官ヲ政（攻）ベシ」トテ、案内者ヲ付。定綱ハ彼ノ案内者ヲ先トシテ、後ヘ搦手ニ廻ル。経高ゾ前ヨリ打入ル。未搦手ノ廻ラヌ先ニ打入テ見ケレバ、元ヨリ古兵ニテ、待ヤ受タリケム、サ知タリトテ、散々ニ射ル。敵ハ未申ニ向、経高ハ丑寅ニ向フ。月モアカ、リケレバ、互ノシワザ隠ル、事ナシ。寄合テ戦ホドニ、経高薄手負ヌ。サルホドニ、高綱後ヨリ来加タリケルニ、矢ヲバヌカセテケリ。サテ兼行ヲバ、定綱・盛綱押合テ、打ヲ、セツ。判官ガ館ト兼行ガ家ト、間五町計也。敵打ヲ、セテ後、ヤガテ奥ノ屋牧ノ館ヘゾ馳通りケル。

兵衛佐ハ綏（縁）ニ被立タリケルガ、景廉ガ来ヲ見給テ、「折節シ神妙ナリ。景廉ハ頼朝ガトギニ候ベシ」ト被置タリ。遥ニ夜深テ後、「今夜時政ヲ以、兼隆ヲ誅ニ遣ツルガ、『誅ヲ、セタラバ、館ニ火ヲ懸ヨ』ト云ツルガ、遥ニ成レドモ火ノミヘヌハ、誅損ジタルヤラム」ト独言ニ宣ケレバ、景廉聞アヘズ、「サテハ日本第一ノ御大事ヲ思食立ケルニ、今マデ景廉ニシラセサセ給ハザリケル事ノ心ウサヨ」ト云マ、ニ、ヤガテ甲ノ緒ヲシメテ、ツト出ケルヲ、兵衛佐、景廉ヲ召返テ、銀ノヒルマキシタル小長大刀ヲ、手カラ取出給テ、「是ニテ兼隆ガ首ヲ貫テ參レ」トテ、景廉ニタブ。景廉是ヲ給テ走向。歩人一人具シタリケル、兵衛佐ヨリ雑色一人被付タリケルニ、長大刀ヲバ持テ、判官館近走テ見レバ、北条ハ家子郎等多手負、馬共イサセテ、白ミテ立タル所ニ、景廉来加ケレバ、北条云ケルハ、「敵手ゴワクテ、已ニ五六度マデ引退タルゾ。佐々木ノ者共ハ兼行ヲバ打テ、此館ノ後ヘ搦手ニ向タルナリ」ト云ヘバ、「シタ、カナラム者ニ楯突セテタベ。一宛アテ、ミム」ト申ケレバ、北条雑色男、源藤次ト云ケル者ニ楯ツカセテ、馬ヨリヨリテ、弓矢ハ元ヨリ持ザリケレバ、一人ノ弓張矢三筋カナグリ取テ、楯ノ影ヨリ進出テ、矢面ニ立タル敵三人、三ノ矢ニテ射殺シツ。サテ弓ヲバ抛テ、長大刀ヲ茎短ニ取成テ、甲ノシコロヲ傾テ、打払テ内ヘツト入、侍ヲミレバ、高燈台ニ火白クカキタテタリ。其前ニ淨衣着タル男ノ、大長大刀ノ鞘ハツシテ立向ケルヲ、加藤次走違テ、小長大刀ニテ弓手ノ脇ヲサシテ、投臥タリ。ヤガテ内ヘ責入テミレバ、額突ノ前ニ火ヲコシタリ。又火白クカキ立タリ。栩唐紙ノ障子立タリケルヲ細目ニアケテ、大刀ノ帯取、五六寸計引残テ、敵是ニ入タリト思テ、見出タリ。加藤次、^(ママ)二長大刀ヲ以テ障子ヲ差開テミレバ、和泉判官ヲバ、住所ニ付テ八牧判官トゾ申ケル、判官片膝ヲ立テ、大刀ヲ額ニアテ、入ラバ切ラムト思ヒタリゲニテ、待懸タリ。加藤次シコロヲ傾テ、入ラムトスル様ニスレバ、判官敵ヲ入ジト、ムズトキル所ニ、上ノ鴨居ニ切付テ、大刀ヲ抜ムトシケルヲ、貫モハテサセズシテ、シヤ頸ヲ差貫テ、投伏テ頸ヲカクヲ見テ、判官ガ後見ノ法師、元ハ山法師ニ注記ト云者ニテ有ケルガ、ツトヨル所ヲ二ノ刀ニ頸ヲ打落ツ。サテ主従二人ガ首ヲ取テ、障子ニ火吹付テ、心ノスムトシハナケレドモ、

法華經ヲ一字モヨマヌ加藤次ガ八卷ノハテヲ今ミツルカナ

ト打詠メテ、ツト出テ、「兼隆ヲバ景廉ガ討タルゾヤ」ト訃リケリ。判官ガ宿所ノ焼ケルヲ、兵衛佐見給テ、「兼隆ヲバ一定景廉ガ討ツルト覚ルゾ。門出吉」ト悦給ケルホドニ、北条使者ヲ立テ、「兼隆ヲ景廉ガ討テ候ナリ」ト申タリケレバ、兵衛佐「サレバコソ」トゾ宣ケル。景廉ハ非^{アグルノミニ}「マ」^マ戦功於當時ニ、専^マ残^マ名望於後世ニ。

参考資料 2

『吾妻鏡』治承四年八月十七日条（原漢文）

丁酉、快晴。三島社の神事なり。藤九郎盛長、奉幣の御使として社参し、程なく帰参す（神事以前なり）。未の尅、佐々木太郎定綱・同次郎経高・同三郎盛綱・同四郎高綱、兄弟四人参著す。定綱・経高は疲馬に駕し、盛綱・高綱は歩行なり。武衛その体を召覧せられ、御感涙頻りに顔面に浮べ給ふ。汝等が遅参に依つて今曉の合戦を遂げず、遺恨万端の由仰せらる。洪水の間、意ならず遅れ留まるの旨、定綱等これを謝し申すと云々。

戊の尅、藤九郎盛長が僮僕、釜殿において兼隆が雑色の男を生虜る。但し仰せによつてなり。この男、日来殿内の下女に嫁するの間、夜々参入す。しかるに今夜、勇士等殿中に群集するの儀、先々の形勢に相似ず、定めて推量を加へんかの由、御思慮あるに依つて、かくの如しと云々。しかる間、「明日を期すべきにあらず。おのおの早く山木に向ひて雌雄を決すべし。今度の合戦を以て生涯の吉凶を量るべき」の由仰せらる。また合戦の際、まづ火を放つべし。故にその煙を覽んと欲すと云々。士卒已に競ひ起る。北条殿申されて云はく、「今日は三島の神事なり。群参の輩下向するの間、定めて衢に満ちたらんか。仍つて牛鞞大路を廻らば往反の者のために咎めらるべきの間、蛭島融を行くべきか」てへれば、武衛報へ仰せられて曰はく、「思ふところ然なり。但し事の草

創として閑路を用ゐ難し。はたまた蛭島通においては、騎馬の儀叶ふべからず。ただ大道たるべし」てへり。また住吉小大夫昌長〈腹巻を着す〉を軍士に副へらる。これ御祈祷を致すに依つてなり。盛綱・景廉は宿直に候ずべきの由を承りて、御座右に留まる。

しかる後、蕨木を北に行き、肥田原に到る。北条殿駕を扣へて、定綱に対して云はく、「兼隆が後見堤権守信遠は山木の北方にあり。勝れたる勇士なり。兼隆と同時に誅戮せずんば、事の煩ひあるべきか。おのおの兄弟は信遠を襲ふべし。案内者を付けしむべし」と云々。定綱等領状を申すと云々。

子の尅、牛嶽を東に行き、定綱兄弟は信遠が宅の前の田の頭に留まり訖んぬ。定綱・高綱は案内者〈北条殿の雑色、字は源藤太〉を相具して、信遠が宅の後に廻り、経高は前庭に進みて、まづ矢を発つ。これ源家、平氏を征する最前の一箭なり。時に明月午に及びて、殆ど白昼に異ならず。信遠が郎従等、経高の競ひ到るを見て、これを射る。信遠また太刀を取り、坤の方に向ひて、これに立ち逢ふ。経高弓を棄て、太刀を取りて、艮に向ひて相戦ふの間、両方の武勇掲焉なり。経高矢に中る。その刻、定綱・高綱後面より来り加はりて、信遠を討ち取りをはんぬ。

北条殿以下、兼隆が館の前、天満坂の辺に進みて矢石を発つ。しかるに兼隆が郎従は、多く以て三島社の神事を拝せんがために参詣し、その後、黄瀬川宿に到り留まりて逍遥す。しかれども残り留まるところの壮士等、死を争ひて挑み戦ふ。この間、定綱兄弟、信遠を討つ後、これに馳せ加はる。

爰に武衛、軍兵を発するの後、縁に出御し、合戦の事を想はしめ給ふ。また放火の煙を見しめんがために、御厩舎人江太新平次を以て樹の上に昇らしむと雖も、やや久しく煙を見ること能はざるの間、宿直のために留め置かるるところの加藤次景廉・佐々木三郎盛綱・堀藤次親家等を召し、仰せられて云はく、「速やかに山木に赴きて合戦を遂ぐべし」と云々。手づから長刀を取りて景廉に賜ひ、兼隆が首を討ちて持参すべきの旨、仰せ含めらると云々。仍つておのおの蛭島通の堤に奔り向ふ。三輩皆騎馬に及ばず。盛綱・景廉、厳命に任せてかの館に入り、兼隆が首を獲たり。郎従等も同じく誅戮を免れず。火を室屋に放つて、悉く以て焼失す。

既に暁天、帰参の士卒等、庭上に群居す。武衛、縁において兼隆主従の頸を覽ると云々。